株式会社アルバック

2027 年 6 月期 第 1 四半期 WEB 決算説明会(2026 年 11 月 10 日開催)およびアナリストミーティングの主な質疑応答

決算概要

Q1 **1Q 実績は大幅な増収増益となったが、計画通りなのか。3 か月前と比較した事業環境とともに総括してください。**

A 1Q 実績は、総じて上振れての着地となりました。8 月(3 か月前)の時点では、期首ということもあり少し保守的に見ていたが、大きなリスクも顕在化せず、各事業が好調に推移しました。

- 【受注高】 1,166 億円(前年同期比+93%)
  主に半導体電子とレアアース関連が牽引し、四半期ベースの過去最高となった。
- 【売上高】 733 億円(同+39%)
  前期末の高水準の受注残高 1,761 億円に加え、半導体の追加獲得案件が寄与した。
- 【営業利益】62 億円(同+170%)
  増収に伴う売上総利益の拡大が、販管費等の増加を吸収しました。

Q2 **受注高 1,166 億円は、一時的な大型案件によるものか。今後も続く水準ですか。**

A 特定案件に依存したものではなく、ロジック、DRAM、PCRAM、光通信、ディスプレイ、レアアースと幅広い分野で受注が増加しました。受注高予想も 2,900 億円へ引き上げており、良好な事業環境は継続すると見ています。2Q については、1Q へ前倒しで受注した案件もあったため、四半期ベースでは落ち着きます。下期については、現時点の見通しを反映し予想を見直しましたが、引き合いも多く精査中であるため、今後の上積み余地はあると考えております。

Q3 **売上総利益率の変動要因について教えてください。**

A 売上総利益率は 29.2%となり、EV 関連の一過性要因があった前 4Q の 25.4%からは大きく改善しております。前年同期比では 0.5 ポイントの低下となりますが、四半期ベースでは工事進行基準の適用による変動が生じやすくなっております。2Q はプロダクトミックスの改善等により大きく改善する見込みであり、上期トータルで見ていただく方が、当社の実力値に近いと考えております。

Q4 **営業利益の増減要因を教えてください。また、販管費が増加傾向になっているが、今後も増加していくのですか。**

A 半導体電子を中心とした増収に伴い売上総利益が拡大し、販売関連費用等の増加を吸収して+39 億円の増益となりました。また、成長領域への研究開発費の投下や、ベースアップ・賞与・人員増強による人件費の増加は、今後の成長のために計画的に進めております。一方で、バリューアッププランの一環としてコスト削減策も推進しており、売上成長に見合った適切なコストコントロールを継続してまいります。

Q5	**課題となっている部材調達について、足元の状況を教えてください。**
A	調達環境のタイト化に対しては、代替調達先の開拓や先行手配など、平準化に向けたさまざまな施策を打っている最中です。足元ではまだ一部影響が残っておりますが、これらの対策を進めることで、下期中には平準化させていきたいと考えております。

Q6	**フリーキャッシュフロー＋230 億円は、今後も続く水準ですか。**
A	営業キャッシュフローが前期から 102 億円増加したことに加え、子会社株式売却による約138 億円の一時的な収入により投資キャッシュフローもプラスとなりました。230 億円には一時的要因が含まれているため、2Q 以降は平準化する見込み。

品目別 受注/投資動向

＜半導体及び電子部品製造装置＞

Q7	**ロジックの中国向け MHM 需要は継続しますか。**
A	ロジックの受注高は前年同期 56 億円から 137 億円に増加しました。中国向け MHM の横展開が進み、高水準の受注が継続しています。下期以降につきましても、各社の堅調な投資計画を背景に一定水準の需要が継続すると見ております。

Q8	**DRAM の受注高が増加した背景を教えてください。その一方で、売上高は 36 億円から 6 億円に減少していますがなぜでしょうか。**
A	Top3 メーカーに加え、台湾 DRAM メーカーの設備投資が大きく寄与した。一方、売上高の減少については、案件の進捗に応じた工事進行基準の適用タイミングによる四半期毎のバラツキや、一部顧客の検収基準の兼ね合いが要因です。豊富な受注残を有しておりますので、2Q 以降に順次売上に計上されていく見込みです。

Q9	**NAND/PCRAM の受注高増加の中身について教えてください。**
A	受注高は前年同期 14 億円から 78 億円に増加しました。中国 PCRAM の立ち上げに伴う投資を取り込んだことが要因です。今後も NAND 投資は継続すると見込んでおります。なお、PCRAM は立ち上げフェーズのため、当期の追加受注は見込んでいません。

Q10	**パッケージングの受注高が大きく減少しているがなぜですか。今後の見通しとともに教えてください。**
A	受注高は前年同期 60 億円から 24 億円となりました。WLP 向けアッシング装置が貢献しているほか、日本・台湾向けに PLP 用アッシング装置も受注しています。受注のタイミングが 2Q に寄っていることもあり、上期段階で計画水準に戻る見込み。

Q11	**光通信関連が好調のようですが、足元の状況を教えてください。**
A	各種電子部品の受注高は前年同期 27 億円から 105 億円に増加しました。データセンター向け光通信関連投資の活発化が背景です。この旺盛なデータセンター需要は当面継続すると見ており、今後のさらなる拡大にも期待しております。

＜ディスプレイ・エネルギー関連製造装置＞

Q12　ディスプレイの受注高が倍増した理由と持続性を教えてください。

A　受注高は前年同期 130 億円から 262 億円に倍増しました。LCD では車載向け G8 パネルの新規ライン投資に加え追加設備・改造案件、OLED ではスマートフォン用フレキシブルパネル等の搭載拡大に伴う追加設備・改造案件が寄与しました。足元の設備投資意欲は堅調であり、一定の持続性はあると見ております。

＜一般産業用装置＞

Q13　レアアース関連の受注高が急増している背景と見通しについて教えてください。

A　1Q 受注の地域別構成は欧州 44%、北米 39%で、欧米が 8 割以上を占めるなど、引き続きサプライチェーン再構築に伴い需要が拡大しています。また、引き合いの確度も高まってきており、早期の受注獲得を目指しています。

＜コンポーネント／マテリアル／その他＞

Q14　各品目で受注高増加の中、マテリアルの受注高が減少しているはなぜですか。

A　半導体向けターゲット材は好調で、新たな評価案件も拡大しています。一方、ディスプレイ関連事業の売却に伴う事業規模縮小の影響により、受注高は前年同期 78 億円から 68 億円に減少しました。

業績予想

Q15　上方修正の内容と前提を教えてください。収益性が期首想定より下振れる予想とされましたが、なぜでしょうか。

A　1Q の好調な進捗に加え、高水準の受注残高や良好な事業環境の継続が見込まれるため上方修正します。受注高は前回予想 2,600 億円から 2,900 億円、売上高は 2,550 億円から 2,830億円、営業利益は 280 億円から 300 億円へ修正します。収益性については、コストを含めて現時点では堅くみていることから、若干前回予想を下回る予想とした。また、増収のうち 50 億円程度は低採算案件であり、これも織り込んでいます。

Q16　1Q の進捗率や好調な事業環境を加味すると、修正後の予想も保守的ではありませんか。

A　豊富な受注残高が順次売上に寄与していく見込みであり、さらなる上振れの余地も考えられます。一方で、足元の部材調達環境のタイト化への対策を下期に向けて推進している最中であることから、下期については現在精査中として、各利益項目の予想を据え置いております。

Q17　下期の受注高予想は 200 億円の下方修正になっていますが、なぜでしょうか。

A　上期は前倒し気味に受注が計上される見込みであり、下期については現時点での見通

しを反映しているが、引き合いも増えていることから状況を見つつ、適宜見直していきます。

Q18　半導体電子の受注高予想を据え置いておりますが、1Q 進捗に加えて好調な市場環境から、上方修正でも良いと思えますがなぜでしょうか。

A　1Q および上期としての進捗は、事前の想定通り順調に推移しております。良好な市場環境を鑑みますとさらなるアップサイドも期待できる状況ではございますが、下期の動向については、現在より精緻に精査している段階であるため、現時点での通期受注予想は一旦据え置く判断といたしました。

Q19　当期純利益を上方修正したが、配当予想を据え置いたのはなぜでしょうか。

A　配当予想につきましては、今回は前回予想を据え置きといたします。期末の配当につきましては、通期の業績と財務状況を踏まえ、改めて判断してまいります。

バリューアッププラン

Q20　事業改革の進捗について教えてください。

A　先月(10/27)開示の通り、8 社中 7 社の非連結化に向けて進捗しました。残り 1 社も交渉を進めており、当下期中には完了する見込みです。

Q21　生産改革の進捗を教えてください。

A　部品・材料調達の再構築、工場スペースの有効活用などキャパシティ増強等の生産体制強化に注力しています。モジュール化・L/T 短縮は併行して進めています。

Q22　27/6 期の売上高予想は既に中間目標 2,600 億円を超過していますが、目線は変えないのですか。

A　バリューアッププランの中間目標(28/6 期)は、売上高 2,600 億円、営業利益 390 億円、営業利益率15%としております。引き続き、売上規模の拡大は目指すとともに、今後は目標に掲げている「営業利益 390 億円、営業利益率 15%」の達成にプライオリティを置き、収益性の向上に注力してまいる所存です。